

新しい文学教育の地平に向けてⅡ

企画代表者 都留文科大学 田中 実
 話題提供者 埼玉大学 戸田 千里
 山梨大学 須貝 馬場
 米沢短期大学

企画趣旨

田中 実

今回の企画は、前回第105回沖縄大会の〈「新しい文学教育の地平」に向けて〉の継続・発展であり、「新しい文学教育の地平を拓く」という課題は、目標を達成するまで持続的に発表していこうと願っている。

企画の趣旨の根底には、伝統的に国語科教育の中心に位置付けられていた文学教育を改変させる必要性であり、その要請に基づいている。二十世紀後半、構造主義の登場によって、言語論もパラダイム転換を迎え、テキスト理論が登場し、ポストモダン運動が終焉した今日、文学教材を「読むこと」とは何だったか、改めて原理的に解明されなければならない。

残念ながら、現在の全国大学国語教育学会において、文学作品を「読むこと」のメカニズムの実態は解明されていない。「ない」だけでなく、「ない」という共通認識も「ない」。「ない」ことの自意識が「ない」のである。これが本学会に対する筆者の見通し、先入観である。端的に言えば、文学作品を「読むこと」に「正解」が「ある」のか、「ない」のか。「ある」のなら何故「ある」のか、「ない」のなら何故「ない」のか。こうした基本的問題に全国大学国語教育学会は学会としての共通認識を持っていないと思われる。文学研究の学会であれば、研究対象は各自の自由、研究者の恣意に委ねるしかないが、公教育を背景にした国語科教育においては、手をこまねいて、各自に任せるわけにはいかない。これは国語科の基本の基本であり、全国大学国語教育学会の存在意義（レーゾン・デートル）に関わる問題と言って言い過ぎではない。教育現場の臨床と原理の要請は全国大学国語教育学会の存在の根拠、アイデンティティでもあると思う。

「読むこと」の原理を解明していく行為抜きに、「読むこと」の倫理や公共性を考えることはできない。今回は「読むこと」のメカニズムの解明を前提にし、文学教育の本質的な問題が戸田・馬場・須貝の各氏から発表される。これまでの議論の枠組みを超えて、今日の教育改革問題と対峙することを期したい。と述べたが、これはやや建前に偏し、力み過ぎたかもしれない。学会員との対話、交流の場を提供することが先であろうか。

「双子の子」を産んだのは誰だ

須貝 千里

日本国憲法と教育基本法の「改正」が問題化されている。今秋以降、具体的な政治問題化していくことであろう。なんらの反省の弁もなくなされた「個性と多様性の尊重」から「個に応じた指導」へ（2003年10月7日 中央教育審議会答申）という、「ゆとり路線をめぐる言説の一見微妙な転換には、単なる「学力低下」対策だけでなく、こうした動向の影を読み取ることができる。それは「尊重」から「指導」に転じた、その中身にかかわる問題である。

本年2月3日に文化審議会から文部科学大臣に「これからの時代における国語力について」という答申がなされた。この文章では「祖国愛」が問題にされ、「文学作品」の教材価値が高く評価されている。そして「読書」の大切さが提唱されている。中教審では新学習指導要領に向けての議論が開始され、年内にも基本的な方向が発表されるという。漏れ聞くところによると、そこでの議論では文化審答申は敬して遠ざけられているようであるが、この提起をいかに取り入れるかに、その場の潜在的な焦点があるはずである。なぜなら、日本国憲法と教育基本法の「改正」の問題と中教審の論議は連動しているから。

いま求められていることは、「個性と多様性の尊重」という非実体主義の学力観から「個に応じた指導」という実体主義の学力観に、再び転換することではなく、「ゆとり路線」の徹底的な総括である。

「ゆとり路線」という「エセアナーキー」を徹底的に批判しぬくことが、これからの教育・国語教育をひらいていくことになる。そうでなければ、「エセ絶対主義」が教育・国語教育を再び支配することになる。「エセアナーキー」と「エセ絶対主義」とは「双子の子」なのだから。

唐突に思われるかもしれないが、わたくしにとって田中実氏の〈原文〉という「実体性」の提起は、単なる文学作品の〈読み〉の提起をめぐる提起ではない。氏が問う、〈読み〉の倫理と文学の公共性の問題は、教育・国語教育の抜本的な転換を図る提起につながっていく。当日はこのことを語り、わたくしの教育改革の展望を示したい。

「文学の〈講義〉の教育的意義について」

馬場 重行

中国で近代小説の講義をしていた時のことである。ある学生にこう言われたことがある。

「なぜ、日本の近代小説は暗い話ばかりなのですか。」

確かに、明治以来の代表的作品には、「病い」「悪」「苦悩」「失恋」「裏切り」「自殺」「殺人」といった「暗い話」を題材にしたものが多い。仮にそれら「暗い話」を〈毒素〉と仮称しておくと、日本の近代小説には〈毒素〉を必須とする意味があったはずであり、そして、文学教育においても実はこの〈毒素〉の飛沫をしっかりと受け止めることこそが重要だと思われる。今回の報告では、文学の〈毒素〉の重要性を踏まえて、これをいかに抽出し、どう「教室」の場に拓くかをめぐって、具体的な作品を用意して考えてみたい。